

1966年東京生。東京大学法学部卒業。ハーバード大学公衆衛生学大学院修士号取得。カレッジ・ウイメンズ・アソシエーション・オブ・ジャパン奨学生。有限会社マリポーサ取締役、対米不動産投資コンサルタント。2004年、超未熟児を出産し、そのとき、母子ともに、手厚い先進国医療により、救命された経験から、翌2005年、医師の介添えなく出産することによる障害に悩む産科フィスチュラ患者治療の名門医院、アディス・アババ・フィスチュラ病院を支援するフィスチュラジャパン設立。現在、同病院の国際的な支援ネットワーク内名称統一のため、ハムリンフィスチュラジャパンと改名。日本初の産科フィスチュラ罹患患者支援団体として、主要紙にも取り上げられている。2009年1月現在、400万を現地に送金した実績を持つ。HPは、<http://www.fistula-japan.org>。

#### 活動内容の主要メディアへの掲載歴

2005年9月5日読売新聞朝刊家庭欄掲載『難産で失禁「産科フィスチュラ」途上国の女性救おう』  
2005年9月24日朝日新聞夕刊掲載『「現代のマザー・テレサ」助けたい』  
2006年2月25日毎日新聞朝刊家庭欄『産科フィスチュラ 出産時腸などに穴』  
2007年6月6日中国新聞「この人」欄『死産の危険。「アフリカだけの問題じゃない」』《共同通信取材》

#### 主要執筆履歴

「産科フィスチュラ (Obstetric Fistula) について」助産師第60巻第1号 (2006年2月1月)  
「産科フィスチュラとはなにか」助産雑誌第61巻第3号 (2007年3月25日発行)  
「産科フィスチュラとは何か」アフリカNOW71号掲載 (2005年11月号)

#### 主要講演履歴

2006年3月25日  
青山ウイメンズプラザ第二会議室Aにてフィスチュラジャパン主催報告会。  
2006年7月19日  
於津田塾大学国際関係学科三砂ちずる教授招聘外部講師藤崎智子『国際協力論』最終講義。  
2006年9月29日  
フィスチュラホスピタルのドキュメンタリーフィルム上映会。代々木国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催。  
2007年2月17日  
国際ソロプチミスト東京・狛江主催公開講座「産科フィスチュラ(ろうこう)の現状～途上国の貧困が女性に及ぼす劣悪の環境～」  
2008年11月6日  
第49回日本母性衛生学会メインシンポジウム於「An Overview: Addis Abeba Fistula Hospital's Fight with Obstetric Fistula」(英語)  
2009年9月9日ハーバード大学日本同窓会主催「Harvard Women for Social Justice」(英語)

ハムリンフィスチュラグループは、2009年、50周年記念を迎えました。  
ハムリンフィスチュラジャパンは、2010年、5周年記念となります。  
記念事業について、別途お問い合わせください。

日本語、英語にての取材、執筆依頼や講演依頼を承ります。  
ご連絡は、中山道子へ  
[m-nakayama@fistula-japan.org](mailto:m-nakayama@fistula-japan.org) 携帯 080-3250-3240

エチオピアの産科フィスチュラ治療を支援する

なかやま みちこ  
中山 道子さん(41)



この人

ための病院を支援して、今年四月で二年を迎えた。

産科フィスチュラ。日本では聞き慣れないが、難産による長時間の産道圧迫で、膣や大腸などに穴が開いて、ふん尿が垂れ流し状態になってしまうもの。医療が普及していないアフリカなどで多く見られる病気だ。エチオピアのフィスチュラ患者の

以上もエチオピアのフィスチュラ患者の

「フィスチュラになると死産するケースも多い。汚臭のため家族と同居できなくなり家を追い出されたり、耐えきれず自殺したりする人もいる」

東京大卒業後、研究生生活を経て米ハーバード大大学院に留学し、公衆衛生学を学んだ。数年前に米国で妊娠中、四十年

死産の危険。「アフリカだけの問題じゃない」

ラ患者を支援してきたオーストラリア人女性、キャサリン・ハムリン医師の活動を紹介したテレビ番組を見て心を動かされた。

その後、難産の末、超未熟児の女児を出産。「先進国にいたおかげで十分なケアを受けられた。一方で、わずかなお金もなく病院に行けない人もいる。人間は不平等だと思った」

日本初とみられるフィスチュラ患者支援団体「フィスチュラジャパン」を立ち上げたのは、帰国後の二〇〇五年四月。以来、会社経営の傍ら、同団体代表として、ハムリン医師が運営するエチオピアの病院に資金援助などを行ってきた。

「フィスチュラは女性の体や健康を考える上でとても大きなテーマ。決してアフリカだけの問題ではない」と訴える。両親と娘の四人暮らし。東京都出身。

(田中寛二共同)

### 難産で失禁「産科フィスチュラ」

# 途上国の女性救おう

東京の団体、支援訴え

出産に伴い起こる「産科フィスチュラ」と呼ばれる性器・泌尿器の障害が、発展途上国の若い女性を中心に広がっているとして、治療を支援する市民団体が東京で設立された。この病気への理解と支援を呼びかけ、寄付や会費を募っている。

手術後、リハビリに取り組み女性たち(6月、エフチオピアの病院で)＝フィスチュラジャパン提供



「産科フィスチュラ」は日本語で「産科瘻孔」と言い、難産の際に適切な医療処置が施されない場合に胎児の頭が母親の産道を長時間圧迫し、膣、ぼうこう、直腸などに穴が開いてしまう障害。患者は慢性的な失禁状態になり、社会生活が難しくなるという。手術で治療は可能だが、アフリカや南アジアを中心に200万人の患者がいるとされている。

この病気の治療を支援するため、「フィスチュラジャパン」が今年4月に設立された。東京都狛江市で通販会社を経営する中山道子さんが呼びかけ、不用品や支援金の寄付のほか、会員も募っている。これまでに、フィスチュラの治療病院があるエ

2005年9月5日  
読売新聞

2005年9月24日  
朝日新聞

チオピアに、洋服の生地100着分を送った。フィスチュラは日本でもなじみが薄いが、国連人口基金(UNFPA)は2年前から撲滅キャンペーンを展開しており、日本も昨年、同基金の予防・治療プ

ロジエクトに約4億円の支援を決めた。中山さんは「産科フィスチュラは体が未成熟な若年妊娠に多く、女性の健康を生涯にわたって脅かす。日本でも理解を深め、今後は資金的な援助も行っていききたい」と話している。

2005年 9月 24日 (土) 読売新聞

くらし 家庭

## 「現代のマザー・テレサ」助けたい

### エチオピアで半世紀、女性の病を治療

# 都内に支援団体

帝王切開できないためにかかる女性の病「フィスチュラ」を、アフリカで半世紀にわたって無料で治療し、「現代のマザー・テレサ」と呼ばれる豪州出身の女性医師がいる。その活動を支援しようとして、都内の女性が支援組織をつくった。  
(平山亜理)



キャサリン・ハムリン医師(中央、フィスチュラジャパン提供)

支援に取り組むのは、非営利団体「フィスチュラジャパン」。代表の東京都狛江市の会社役員中山道子さん(39)は昨年、出張先の米国で、エチオピアでフィスチュラ治療

キャサリン・ハムリン医師のテレビインタビューを見た。フィスチュラは、出産時に赤ちゃんの頭がつかえるためになる病気で膀胱や尿道、直腸の壁に穴

があく。帝王切開できれば問題なく、日本など先進国ではほぼ撲滅された。しかし、アフリカなどの貧しい農村地域では治療が受けられない人が多い。臭気かひどいうえ子どもができないと離婚され、自殺する人もいるという。ハムリン医師は80歳を超えてもエチオピア・アデイスアベバの「フィスチュラホスピタル」を率いる。

エチオピアでは、毎年約9千人が新たにこの病気になる(病院推計)。病院は、これまでに2万4千人を超える人を無料で治療し、女性の自立に向けて、看護助手などとして教育や訓練もしてきた。

手術や2週間の入院にかかる費用は約5万円。中山さんは「寄付金を病院に送るほか、日本人に知ってもらうため、ビデオ上映会などを開きたい」と話す。ホームページは、<http://www.fistula-japan.org>

